戦後の子どもたちの食料事情

　戦争は悲惨でした。現在の川崎区と幸区のほとんどが焼け野原と化しました。何よりも食料事情は極度に劣化していました。
　新制学校教育制度が発足し、子どもが川崎市内の学校へ、疎開地から、中国大陸から戻ってきました。多くの子どもは栄養不良や身体虚弱状況にあり、学習活動に耐えるのはつらいことだったそうです。
　各学校では、教師の約半数が急増する子どもの指導にあたり、残りの教師は近隣の漁家や農家へ出かけ、干した小魚や味噌を無償提供してもらう仕事にあたりました。
　一杯の薄い味噌汁を飲みたいために登校する子どももいたそうです。

昭和43年5月　川崎市教育委員会発行 「学校給食の20周年記念誌」から